SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

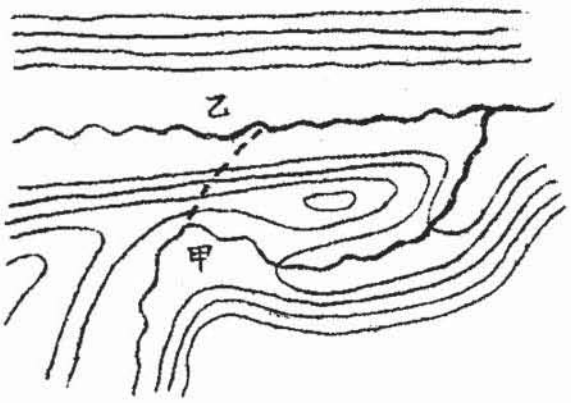
狩野川台風の感想：巻頭言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-08-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, 勝海 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006029

狩野川台風の感想（巻頭言）

望　月　勝　海

9月26日の台風による雨の中心は松崎・湯が島・中大見・宇佐美を通るように思われる。あちこち斜面がくずれ沢という沢は急流があふれ、天城北側の濁水が集って田方平野におしだした。「山が割れた」と伝えられる筏場新田では、河床下にひそむ粘土層の表面をすさまじく水が流れ、それに斜めに接し上位にあたる軽石礫層が水に飽満し、その中の神代杉をとったたくさんの穴がキツカケとなり、甲の水が遠まわりをやめ近くの低い乙の谷へ流れこんだ。軽石層を割る峡谷ができ、いまは粘土層にかゝる滝がどんどん後退しつゝある。湯が島にある谷中の山も、狩野川を猫越川の谷が横から奪って生じた点で似ている。



こんな変化はあったが、全体を地質学的にながめると、第四紀いな沖積世に入ってからの地形変遷とくらべ、ほとんど問題とならない。自然と人の営みとの関係について、あらためて考えさせられる。自然そのものからすれば当然なむしろ日常的な現象が、人類にとって災害となる。富士山における侵食すなわち大沢崩れの対策にしても同様である。どうしてこの悩みを解消するか。自然の進行をおくらせるか。人知は天を征服したなどと思いあがっているが、われわれの思うにまかせぬことは人の心の中ばかりでなく、科学技術の方面にもまだ沢山あるのである。以上、いきなり巻頭言をもとめられ、思いうかぶまゝをしるした。